

戦争を「語り伝える」会に行く

酒井 董美ただよし

会の後の記念写真 ①左から 安田庸子会長
安達友紀講師 ② 山崎崇子（従妹） 筆者

「文化の日」の3日、午前10時から12時までの間、標記の会（会長・安田庸子氏Ⅱ同町横田在住）が仁多郡奥出雲町立横田コミュニティセンター農村婦人の家であった。事前に親しい安田会長さんから案内状をいただいていたので、従妹の山崎崇子を誘い、マイカーで出かけてきた。わが家から会場まではやや遠くて、8時に出発し9時45分に到着した。演題は「戦争」について若い世代に伝えたかったこと”。講師は元島根県立高

校教諭・安達友紀氏（66歳・地歴・公民科担当）であった。

会場の室内を見渡したところ、聴衆は30名くらいのものであったが、演題で期待されている「若い世代」は残念ながら見当たらず多くは高齢者だったようだ。

講演は事前に準備されていたA4判のコピーが4枚配布された。一部を紹介すると、『横田町誌』から調べられた明治10年の西南戦争の旧横田町の戦死者1名から始めて、日清戦争、北清事変、満州事変から第二次世界大戦までの同地区の戦死者数が細かく示され、総計317名となっている。資料では、国際連盟の「不戦条約」（1928年）、「ポツダム宣言・全文」（1945年7月26日）、「日本国憲法・前文」、「出雲地方（沿岸部）の戦争遺跡」の写真9点と図表2点があり、聴衆としては、より具体的に講師の説明がよく判りありがたかった。従妹も帰りの車中で「説明の言葉もやさしかったので大変に分かりやすかった」と喜んでくれた。

講演終了後、筆者について松江市から来た特異な聴衆として、主催者からいきなり名を呼ばれ、経歴まで紹介されたので、感想を述べる必要があった。具体的には、「高校時代に返ったように授業を受けている気持ちになりました。具体的に各戦争ごとの旧横田町の戦死者の数字を挙げながらの説明は、とても分かりやすく地元の方々にもよかったです」と感想を述べた上、終戦直前まで筆者は大阪に住んでおり、当時9歳だった昭和20年3月に、空襲に遭った体験を具体的に話すことが出来たのは、そのような直接の経験を持っていない聴衆の方々に、少しは役に立ったのではなからうかと思った。筆者の話に耳を傾けられた安達講師は、「集団疎開で大阪方面から島根県に来ていた6年生たちが、せめて卒業式を大阪の母校で受けたいと帰ったところへ空襲があり、亡くなった児童も多数あったのです」と補足なさる一幕もあった。

鳥上中学校勤務時代6年間を過ごした当地は、中国山地の中にありながら、なかなか住民の文化程度の高いく所であり、懐かしい地方である。そのようなことでのこの日の講演会参加は、実りの多い満足した半日であった。